

氏名（本籍） タ ナカ タカコ
 田 中 多佳子（東京都）
 学位の種類 博 士 （音 楽）
 学位記番号 博 音 第 38 号
 学位授与年月日 平成11年 3 月 25日
 学位論文題目 〈論文〉 ヒンドゥー教徒の集団歌謡「サマージュ・ガーヤン」研究

論文審査委員

論文審査（主査）	東京芸術大学	教授	（音楽学部）	柘 植 元 一
（副査）	“	“	（ “ ）	上 参 郷 祐 康
（ “ ）	“	“	（ “ ）	山 本 文 茂
（ “ ）	早稲田大学	“	（文学部）	西 江 雅 之
（ “ ）	拓殖大学	“	（商学部）	坂 田 貞 二

（論文内容の要旨）

サマージュ・ガーヤンとは、北インド、ブラジュ地方の限られた宗派によってのみ伝承されるヒンドゥー教徒の集団歌謡である。僧侶や信徒によって行われる「儀礼」の本体であると同時に、まぎれもなく、人間の持つ優れた音楽文化の一つと見なされるべきものである。本研究は、この歌謡を主たる研究対象として、音楽的・思想的な様々な角度から検証し、「ヒンドゥー教徒にとって歌とは何か」の説明に通じるような、思想と音楽との結びつきの形を提示することを目指した。

サマージュ・ガーヤンは、ヒンドゥー教の宗教歌謡としての共通の基盤の上に立ちながら、コンテキストにおいてははるかに限定性が高い。このような特徴をとらえ、鳴り響く音響としての側面、宗教思想の発露としての側面の各々を分けて論じ、最後にその二つを結びつける原理を読みとる意識的な解釈を試みた。

そのための具体的な手段として、現地調査によって収録したサマージュ・ガーヤンおよび様々な宗教歌謡に関する情報をすべてデータベース化した。その情報には、音楽的側面、歌詞の側面、演奏の空間など様々な情報を含めた。そして、各々のデータ項目の記述と関係の解釈を重ねながら、サマージュ・ガーヤンの根底にある考え方を探し求めてゆく中で、次第にうかびあがってきたのが、「シュリンクラー śrmkhalā」すなわち「連鎖、連なり」という概念の重要性である。集団は人と人の連鎖によってなりたつが、それをさらに補強するものが、人と人とが二手に分かれて歌う歌唱形式であると考え。集団でかけ合いながら一つの詠歌を歌ってゆくスタイルそのものが、個人が神に対するのとは違う、人と人との連鎖を強調するものである。

サマージュ・ガーヤンの儀礼は、もとは異なる作者の独立した作品であった詠歌を、自分たちの神への思いに合わせて再構築した独特な連鎖によって構成されていた。詠歌の連鎖は、その中

で歌われる神の遊戯の連鎖にほかならない。そして、神々の遊戯の一つ一つは特定の季節や時間と結びついている。

ヒンドゥー教の時間の観念の中で、特に季節と儀礼は密接に結びついており、規則正しい季節のめぐりは、農業に生きる人々にとって最も重要なことであった。特定の季節には、特定の情感や自然と結びついた行事があり、それはサマージュ・ガーヤンの儀礼の中にも反映されている。サマージュ・ガーヤンの中で表現される世界は、ブラジュという聖域に生き生きと生きる人々と神々との親しい遊びであり、それは寺の中と外の人々の連鎖を物語るものでもある。

サマージュ・ガーヤンのそういったすべての連鎖を実現させるためには、音や声という媒体が不可欠な要素である。歌うべき言葉はテキストに書き記すことはできても、複雑な音の側面を人々の中に身体化することは容易ではない。神の遊戯と季節のめぐりが一体化した儀礼であるサマージュ・ガーヤンは、練習という場を持ち得ない。現実的に音を身体化させるためにも、この歌唱形式自体が有効な装置として機能していたと見られる。すなわち、言葉と一体化した旋律の鎖をかけあいという方法によってつなぎ合わせてゆく構造である。

この歌唱構造は、あらかじめ曲全体を想定して歌い始めるのではなく、目の前の一つ一つの歌詞と旋律の細かな単位をつなぎ合わせてゆくことによって、いつのまにかすべてを歌い終わっているような構造である。韻律とむすびついた歌詞の部分部分は、特定の旋律型と結びついており、また、かけ合いという形の中には、必ず相手の歌う部分に結びつけるような結び目がついていた。一人では到底歌いきれないような歌の全体が、このように先輩と後輩が交互に歌い合っただけによって実現される。ここにもまた、精巧な連鎖の構造が見いだされるのである。

音楽的な要素と神がみとの世界は、季節や時間と密接に結びついたラーガという概念の媒介によって結びつけられた。自然と共に生きている人々は春には春の、夜には夜の独特な音楽の世界をラーガと表現し、詠歌を特定の音の世界と結びつけるための手段とした。たとえ、その内容が今日の芸術音楽の世界でいうラーガと違いがあろうとも、はによって構築してゆくのではなく、相手が歌うと自分が歌うべき形が自然に浮かび上がってくるような構造である。一つ一つの鎖には結び目がついており、互いが相手が歌った機能的な構造を果たしていると考えられる。

連鎖構造は前後の関係の入れ替えや即興的挿入が許されない構造でもある。旋律や歌詞の固定性は、歌詞や旋律の大まかな枠組みの中で、ラーガという核のもとに即興的に音楽を作り上げてゆく古典音楽の構造とは発想的に全く異質なものである。かといって、固定性のきわめて高い西洋芸術音楽のように、あらかじめ最初と終わりがある総体の存在を想定して、個々の部分が機能的に計算して積み重ねられてゆくもの構造と全く異なる。あらゆる個々の部分は次に継続するためにこそある。言葉、旋律、リズム構造、主従集団の歌唱形式、各々個の単位など一つ一つを、確実に順を追っていかないとたちどころに窮してしまうが、この構造に従えば確実に歩んでゆける構造でもある。

しかし、彼らはどこかの終着点へ向かってゆくのではない。この連鎖には始めも終わりも無い円環をなしている。彼らが盛んに言及するリトゥすなわち季節のめぐりのように。それは正確でなくてはならないと同時に必ず繰り返さなくてはならない。その規則正しい時のめぐり、宇宙の秩序の中で、神と人との遊び（リーラー）は果てしなく繰り返され続けてきたのである。サマージュ・ガーヤンの目的はリーラーを行なうこと、そして、それを支えてきたのがこの連鎖構

造であった。

一人の主唱者の意志に導かれるまま、テキストのみを前にそれに付属する要素はすべて自らの記憶のみを頼りとして、参加者たちは日々、季節感あふれる神との遊びへと出かけるのだが、迷うことがないのはこの鎖のためである。サマージュ・ガーヤンの構造にこめられたこのような知恵は、2000年近いバクテイ思想の熟成の過程において、牧畜と共に生きてきたブラジュの人々の生活と信仰心、この地へクリシュナの姿を求めて集まってきたすぐれた聖者たちの才能、後続の人々の絶え間ない努力といったものがあいまって、徐々に昇華され生み出されてきた希有な歴史的結晶であると言えよう。